# 第 38 回　地震国日本のなかの東北

平成 23 年 3 月 11 日東日本大震災を発災した東北太平洋沖地震（M9）の震源域は、日本海溝の岩手県沖から茨城県沖までの南北方向約 510km、東西方向 210km と広範囲に及び、そのため千年に一度といわれる巨大津波が発生した。

海洋国日本列島には、大陸（ユーラシア）・北米・太平洋・フィリピンプレートという大きな四つの岩盤（プレート）が互いにせめぎあうように重なり合っている上に存在しているため、プレート間にひずみが蓄積して、はじけることによる地震が起きやすい状態にある。プレート間地震の発生には通常数十年～数百年の周期性があるといわれる。

太平洋沿岸平野には通常河川からも堆積物が供給されないので植物の残骸が積み重なった状態での泥炭層ができるが、その上に津波が来ると砂層が残されるのである。砂層が津波の痕跡として残される。最近北海道大学平川特任教授らは、気仙沼市大谷海岸の断崖地層から堆積物を調べ、過去 6000 年に 6 回の地震による大津波（三陸大津波）があったという痕跡を発見した（2011 年 8 月 22 日読売新聞）。6 層の津波堆積物や火山灰などにより、年代は古い方から約 5500 年～約 6000 年前の津波、約 4000 年前、約 3000 年前、約 2000 年前、869 年の貞観津波、1611 年の慶長津波などの痕跡の可能性が推定された。さらに約 2000 年前の弥生時代や 3000 年前の縄文時代に大津波があったことが東北学院大学や東北大学による仙台市沿岸部の地層調査でわかった。

日本の地震の年表（インターネット検索）によると、2003 年日本の気象庁マグニチュード算出法が改定されているが、6 世紀の日本書紀に記録に残る初めての地震（現・奈良県明日香村）以来、2011 年 7 月まで、推定を含む M6 以上の地震が 300 回以上、M7 以上が約 80 回位あった。日本は世界の国々のなかでも有数の地震国なのである。

東日本大震災では、東北地方沿岸地域にこの世の終わりを感じさせるような壊滅的被害をもたらしたが、一方ではその地域被災者の人間的特性が表面化したように思われる。発災後の被災地への支援の輪が日本国内のみならず、世界に拡がっているが、様々な支援に対する津波被災地の東北地方太平洋岸地域の人々の応対における寡黙さ、忍耐強さ、他人への忖度、譲り合いなどは、海外の人々には驚きであった。大地震や津波に限らず台

風、洪水などに襲われ、過酷なまでの自然環境の生活状況にあっても、感謝の念を失わず、他人を忖度し譲り合うなどという精神は日本人に共通する特性のひとつであり、とくに東北において目立ったのだと思う。

アフリカに発生した人種から分岐した黄色人種（モンゴロイド）がユーラシア（北方）や海洋（南方）のルートを通って日本列島に移動し先住したのが縄文人（紀元前 1 万年-4 世紀頃）である。日本人の起源は、約 3 万年前から北東アジアか渡来したという研究結果もある。紀元前 4 世紀後に渡来した人種が縄文人と共存したのが弥生時代（紀元前 4 世紀頃-3 世紀頃）である。大和盆地に成立した大和朝廷により、日本列島の住民の大半が大和民族として統合されていった。

日本書紀によると神武天皇（紀元前 660 年即位）の時代から東征があった。大和朝廷初期には関東・東北（蝦夷）・南九州（熊襲）などの部族政権の反乱があり、東北では坂上田村麻呂（平安初期）による蝦夷討伐があった。大和部族には縄文系弥生人と渡来系弥生人の血統が含まれるが、それらの系統人の日本列島で分布は時代を経ても地方によって多少異なっていると考えられる。日本先住民である蝦夷のアイヌ人は大和朝廷軍の東征によって北方へと駆逐されたが、東北の地に混血が残存したことは容易に考えられる。縄文人と弥生人が大概は緩やかに同化したことは、両者の交流の結果としての日本の言葉のなかにもみられる。

例えば、日本最古の歴史書の古事記には神武天皇の東征に出てくる「兄猾（えうかし）と弟猾（おとうかし）」の「うかし」はアイヌ語の「えかし＝長老」の意味である。また現在も青森県に残る言葉「すがる＝蜂」は宮城県では「すがり」ともいうが、これは万葉集巻第九の高橋虫麻呂の歌に出てくる「・・・すがる娘子（をとめ）・・」の「すがる」は「蜂のように腰のしまった」の意味である。「すがる」は男性のプロポーションのよさにも使われた。

東北地方に縄文系弥生人の血統が他の地方と比較して多く残っているという証拠はない。先に述べたような東北人に多く見られる特質は、気質の表現型と言ってもよいものであり、遺伝的要因があると考える。気質は、ローマ時代ガレノスによる多血質・胆汁質・憂鬱質・粘液質の 4 型分類が今日の精神学や生物統計に用いられる気質分類の基礎になっており、遺伝的素因が含まれていると考えられている。東北の人々特性を際立たせている因子として、遺伝的要因に加えて東北の風土性がある。和辻哲郎は「風土・その人間学的考察」のなかで風土の人間精神構造へのかかわりについて考察している。東北の気候、気象、地

質、地味、地形、景観などの総称である環境因子としての風土は、文明が発展途上にある時代の人間が生活していくためには極めて厳しいものであった。

東北の人々の精神構造に影響を及ぼした要因は、遺伝的要因や風土性のほかにも存在しているのはもちろんである。

われわれは、万葉の言葉の中に日本中への言葉の広がりをみた。その後今日の日本仏教の開祖を多く輩出し、さらに無常観思想を生んだ鎌倉時代や、南北朝時代・室町時代・戦国時代を経て江戸時代へ至る。江戸時代は、統一国家の鎖国という閉鎖的な社会環境のなかで独特の武士道・人間の美学というような精神文化が出現した。

今後、東北の精神構造におけるこれらの歴史的要因の関わりについても考えてみたい。